

二)。著者がこれを参考にされれば幸いである。

以上この著作の要点を概観したが、これを貫いているのは領土問題で、これを要約すると、まず一六四九—五二年に沿アムールの地はハバロフによつて最終的にロシア領に併合された。一六八〇年代、この地の経済開発が進むと、清はアムール左岸、ザバイカルの地は清領であるという根拠のない領土要求を出して来た。ロシアは沿アムールの自領全体は防衛し切れないのでアムール河を境界とし、双方が浸透していたアムール右岸の一部は清に譲つて、戦争を平和の内に解決しようとした。然るに清は、ロシア領のネルチンスクに侵入した優勢な兵力をもつて強圧を加えるという、正常ならざる手段をとった。そのためロシアは、アルバジン地区とアルグン河右岸の地区を譲らざるを得なかつたという主旨である。

十七世紀の露清関係の二つの柱は、アムールの問題と外交通商の問題である。筆者が残念に思うのは、本書は後者については前述したように詳細に論じながら、前者のアムールをめぐる両者の関係については最後に要約したようなことが結論的に述べられているだけで、人を納得させるような系統的な論証が欠けていることである。これでは十七世紀の露清関係を総体的に正しく捉えることが難しいというのが、本書を読了後の結論的な印象である。

В. С. Мачинов, *Империя Цин и Русское государство*

*o* XVII веке. Москва. 1980. 312 стр.

R・S・シャルマ著

### 古代インドのシュードラ

——西暦六〇〇年頃に至る下層階級の社会史——

山崎 元 一

本書は、インド古代社会史研究の第一人者として活躍している著者（一九二〇—）が、二十数年前にロンドン大学へ提出した博士学位取得論文である。初版は一九五八年に刊行されているが、多くの重要な問題を抱えた著書であり、また初版の刊行以後このテーマの研究で本書をしのぐ業績はいまだ発表されていないため、改訂増補版が出た機会に内容をやや詳しく紹介し、問題点の幾つかを指摘してみたい。

著者シャルマは、初版以後の歴史研究の進歩や、初版に対する批判などを踏まえ、改訂増補を試みたと記している。新版の内容は、大雑把に言つて八割は旧版のままである。しかし章名はほとんど改められ、またかなり大幅な改訂の手が加えられた章もある。さらに、巻末に関係論文二篇が加わり、

文献目録も補充されている。

## 第一章 歴史叙述とアプローチ

本書の序論である。著者はまず、従来のインド古代社会研究のほとんどが上位三ヴァルナ（バラモン、クシャトリヤ、ヴァイシヤ）を対象としたものであり、また数少ないシュードラ研究も客観性に乏しいものであったことを指摘している。こうした反省の上に立ち、著者は本書の目的を、シュードラの実態を正確に把握しインド古代史の流れの中でシュードラの果たした役割を説明すること、に置いている。

## 第二章 起源

『リグヴェーダ』から知られる前期ヴェーダ時代の社会を扱った章である。

インドに進入したアーリヤ人に対抗した先住民に、ダーサ・ダスュと呼ばれる民族集団がある。両呼称はこれまで、いずれも非アーリヤ先住民の意味に漠然と解されることが多かったが、シャルマは両集団に関する記事を再検討し、ダスュが「殺戮 (hatya)」の対象とされ「アーリヤ人の慣行に従わぬ者 (avrata, apavrata)」とされているのに対し、ダーサにはそうした例は見られず、しかもアーリヤ人部族と連合したダーサ部族もあったことなどを指摘する。そして、こうした

点を論拠に、ダスュが非アーリヤ先住民、ダーサがアーリヤ人と親縁関係にある民族ないし部族であった可能性を論じ、さらに推測をたくましくして、ダーサは前一八世紀の半ばごろインドに到来したアーリヤ系混合民族の先発隊であろうと述べている。あとからやって来た『リグヴェーダ』のアーリヤ人がダーサを仲間として受け入れたのは、言語やその他の文化要素を両者が共有していたからであるという。『リグヴェーダ』時代の後期に入ると、こうした起源のダーサのほかに、非アーリヤ先住民や、敗北・貧困のために下落したアーリヤ人が「ダーサ」の名で呼ばれるようになる。

次にシュードラについてシャルマは、この語がアーリヤ人に征服された特定の部族の名（例えばアレクサンドロス大王の東征時にシンドに拠っていたソドライ Sotras 族）に由来することを論じたあと、そのシュードラがダーサと同様にアーリヤ人と親縁関係にあった民族ないし部族に属し（あるいはアーリヤ人の一派か、『リグヴェーダ』時代の末（前第二千年紀末）にインドに入り（同書の古層に名が現われないことから推測）、そこでヴェーダを奉ずるアーリヤ人に敗れ、第四のヴァルナとして後期ヴェーダ社会に吸収されたものと推測している。また、こうした初期のシュードラ族は、後世のシュードラ・ヴァルナのような「無資格 (disablied)」の存在とはみられていなかったとも述べている。その

後アーリヤ人の一部や先住民の多くが、内的・外的な闘争の結果、家畜や土地を失い隷屬民シュードラの地位に落ちた。

以上のようにシャルマは、前二〇〇〇年から前一〇〇〇年ごろまでの間に、西方・西北方からアーリヤ系民族が波状的に押し寄せたことを推測し、ダーサはその初期の来住者、ヴェーダを奉ずるアーリヤ人は中期の来住者、シュードラは後期の来住者であったと論じているのである。しかし『リグ・ヴェーダ』のなかには、ダーサとアーリヤ人が民族を異にしていたことを示唆する記事も多い。こうした記事に拠りつつダーサを非アーリヤ先住民として把えるのが通説であるが、この通説を覆すには、シャルマの論拠はなお弱いと言わざるをえない。またシャルマ説では、ダーサとインダス文明との関係もはつきりしない。シャルマはウィラー説に拠りヴェーダを奉ずるアーリヤ人がインダス文明の破壊に何らかの役割を果たしたとみているようであるが(頁16)、それならばインダス文明の担い手(ダスユ?)と、アーリヤ系民族の先発隊ダーサとの関係はどうなるのであろうか。

またシャルマは、シュードラ族がアーリヤ系である証拠として、(1)アーリヤ系言語を話すアービーラ族としばしば並記される、(2)『ブラーフマナ』時代にアーリヤ語を解していた、(3)ドラヴィダ族・プリンダ族など非アーリヤ系先住民と並記されない、(4)シュードラの住地がアーリヤ人の住地と重

なる、などの点を挙げているが(頁88)、それらはいずれも、シュードラの起源をアーリヤ社会に編入された非アーリヤ先住民に求める説を否定するのに十分なものとは思われない。シャルマの仮説は興味深いものではあるが、いまだ大方の支持を得るまでには至っていない。

### 第三章 部族対ヴァルナ

(前一〇〇〇年頃—前五〇〇年頃)

本書では、後期ヴェーダ時代のシュードラが経済・政治・社会・宗教の諸面から考察されている。シャルマの説を要約して示すならば、次のようになる。

経済的にみれば、この時代の文献には牧夫・農夫として独立の生計を営むシュードラが登場する一方、シュードラを奉仕階級と定義する記事も見出される。このうち奉仕階級としてのシュードラは、奴隸や農奴というよりはむしろスバルタのヘロットに近く、支配者集団によって総体的に隷屬状態に置かれた者たちである。またアーリヤ人部族の構成員であった職人たちが、この時代にかつての部族仲間から見離され、シュードラの範疇に加えられた。

次に政治的にみると、シュードラに属すと思われる職人階級(車造り、大工など)がラトニンと呼ばれる国家の高官群の一部を構成し、王の即位式(Anubhishikha)などで部分的では

あるが不可欠の役割を果たし、また馬祀祭 (asvamedha) など国家の重要な祭式にもシュードラの一部が参加している。さらに武器を執り戦うシュードラを伝える記事もある。すなわち、この時代にシュードラは、他の三ヴァルナとともに、政治権力の分け前 (限られたものではあるが) に与っているのである。

四住期の制度はこの時代の後期に出現するが、当初にあってはシュードラを除外したものではなかった。シュードラと上位三ヴァルナとを区別する上で決定的に重要なウパナヤナ (入門式) は、はやくは『アタルヴァーヴェーダ』に見出されるが、そこにはヴァルナによる差別 (シュードラ除外) の文言は見当らない。ウパナヤナは部族の正式成員になるための儀式に起源をもつものであり、したがって、かつてアーリヤ部族の一員であったシュードラがウパナヤナを奉行し、ヴェーダの祭式に何らかの形で参加していたことは十分考えられる。この時代の末期になり部族社会が階級社会に変化するにつれ、地位を下落させたシュードラは、ウパナヤナから、したがってヴェーダの祭式から完全に締め出されることになる。

以上のようにシャルマは、この後期ヴェーダ時代に出現するシュードラに、①被征服部族起源と、②アーリヤ人部族内部の階層分化の結果仲間から排除された者、との二種類が存

在することを指摘するとともに、とくに②のシュードラの出現の背景を論拠としつつ、シュードラの地位が比較的高かったことを論じ、この時代を奉仕階級としてのシュードラが出現する過渡的な時代、すなわち地位の「あいまい」であった時代として位置づけている (ちなみに、旧版の章題は「あいまいな地位」)。

シャルマの右の①②の分類は妥当なところであろう。しかし、シュードラ・ヴァルナの形成にあたりいずれが主体であったかということになれば、それは①であろう (「シュードラ」の語がアーリヤ系部族の名に由来するかどうかは別問題である)。シュードラ・ヴァルナは、基本的にはアーリヤ人の部族が先住部族民を総体的に隷属状態に置くことによって成立したとみるべきではなからうか。したがって②のシュードラに重点を置いてシュードラ・ヴァルナの成立を論ずることは、このヴァルナの出現の基本を見失わせることになりかねない。例えば右のウパナヤナ論がそれである。またシャルマは、シュードラ女と上位ヴァルナの男との結婚を可とする慣習を、シュードラがかつて上位ヴァルナの者たちと同一部族に属していたことの反映、すなわち部族内婚の名残りとして捉えるのであるが (p. 70)、これはむしろ支配・被支配両階層の間に一般的に見出される上位婚の一形態とみるべきであろう。

## 第四章 隸屬奉仕と無資格化

(前六〇〇年頃—前三〇〇年頃)

本章で扱われるのは、ガンジス川流域の開拓が進み各地に都市が興起した時代、いわゆる仏教興起時代のシュードラである。シャルマは、ダルマーストラ、グリヒヤーストラなどのバラモン教文獻、仏教・ジャイナ教など非正統派の文獻などを博搜し、階級社会の確立したこの時代にシュードラはもはや「あいまいな地位」であることをやめ、かつて与えられていた部族成員の權利を失い、政治的・経済的・社会的・宗教的に無資格な存在とされ、上位三ヴァルナへの奉仕を義務づけられるに至ったことを論証している。

著者によれば、シュードラの一部に都市の職人のように獨立を比較的享受する者はあったが、大部分は奴隸(*Dasa*、ギリシア世界にくらべて数は少ない)、隸屬的労働者(*karmakara*)、被傭人(*bhrataka*)などの奉仕人であり、一般に土地所有を認められず経済的に非獨立な存在(非納税者)であったという。また一方で、シュードラがある程度の自由と、納税の対象とはならないもののわずかな財産の所有とを認められ、またときには富を得て上位ヴァルナに上昇することもできたこと、逆にヴァイシャ(主体は納税農民)のなかに貧困などが原因でシュードラに下落する者もあったこと、などを指摘している。

シャルマが本章を書くにあたって使用した文獻は多様であるが、成立地と編纂の意図の異なったこれらの文獻に拠りつつ当時のシュードラの実態を明らかにすることは難事である。シャルマの場合もこうした史料批判の点で杜撰なところが目につく。すなわち、ドーアーブ地方を中心とする保守的な農耕社会を背景に成立したバラモン教文獻(とくにダルマーストラ)と、新興のガンジス川中流域の都市社会を背景に成立した非正統派の文獻(とくに仏典)との間の差異に十分な考慮が払われているとは言えないのである。

例えば、シャルマは主としてダルマーストラに依拠しつつシュードラの地位低下・無資格化を論ずるのであるが、シャルマ自身が認めているように、この時代の職人のなかには前代にくらべて経済的実力をつけた者たちがおり、また、ガンジス中・下流域で開拓と農耕にあたった者(納税農民)のなかには、ヴァルナ制度のもとでシュードラとみなされた先住民部族や混血民も多かったのである。この地方の社会の様子を比較的忠実に伝えている仏典の記事によるならば、住民の間ではヴァイシャとシュードラの区別、とくに前者の下層と後者の上層との間の区別は明確に意識されていなかった。奴隸や被傭人に対する蔑視や強制は見られるが、それはあくまでも「奴隸」「被傭人」という身分ゆえのものであり、ダルマーストラなどに記されるような「シュードラ」ゆえの

差別ではない。ダルマリストラのシュードラ差別規定は、必ずしも現実の社会生活を語っていないのである。

なお、シュードラの最下層（あるいはシュードラ以下の存在）として位置づけられる不可触民チャンダーラについて、シャルマはその出現をマウリヤ朝時代の直前にまで下げてゐる。しかし、ダルマリストラ類や仏典などの記事からみて、評者は、おそくとも仏教成立時代の初期までに不可触視されるチャンダーラは出現していたものと考えている。

## 第五章 国家の統制と奉仕階級

（前三〇〇年頃—前二〇〇年頃）

本章で著者は、主としてカウティリヤの『実利論』を史料に用い、マウリヤ朝時代のシュードラの実態について論じている。『実利論』については、それが理論書であり社会の現実を必ずしも反映するものではないこと、現存の『実利論』の成立は西暦二—三世紀までくだることなど、その史料としての限界が論じられてきた。しかし、シャルマは、こうした限界を認めつつも中核部分（とくに第二・三巻）はマウリヤ朝の現実を伝えるものであるとの見解に立ち論を進めている。そして、マウリヤ朝時代においてもシュードラの政治・経済・社会的な無資格性や奉仕階級としての地位は変わらなかったこと、彼らは独立した生活手段をもたぬ農業労働者や

奴隸として、また国家が行う開拓・耕作事業や国営の諸企業（鉱山・工場）の労働者として大量に使用されていたことなどを論じ、さらに、マガダの拡張と貨幣経済の発達とともに大量の奴隸が供給されたこと、農業生産に奴隸がかなり重要な役割を果たしていたことなどを指摘している（前代は主として家内奴隸）。

著者は、右のような議論を展開するにあたって、旧版の叙述に対する重大な改変を行っている。すなわち旧版では、『実利論』中の国家的入植事業の項に記される「śūdrā-kṛakāṇāṃ」が「シュードラの耕作者」と読まれ、シュードラ耕作者を主体とする開拓事業を通じて彼らに一代限りではあるが土地保有権が認められたこと、すなわち、新開地においてシュードラの地位の上昇（納税義務を負った独立の耕作者となった）がみられたことが論じられているのに対し、新版では右の語は「シュードラと耕作者」の意味にとられ、新開地で土地の一次的保有権を与えられたのはこのうちの「耕作者」（ヴァイシャルヴァルナに属す）であり、シュードラは新開地においても奴隸、土地なしの隷属的農業労働者、職人などとして使われたにすぎないと書き改められている（pp. 162—6）。要するに、『実利論』の右の文はシュードラの地位の変化を示すものではないというのである。

この点について評者は、旧版の解釈の方が妥当であろうと

考えている。右の文はシュードラのように移動の自由があり、貧しくかつ労働に忠実な者たちを開拓事業に大いに利用すべきことを述べたものであらう。『実利論』のなかでは、シュードラが土地保有農民になることは必ずしも禁じられてはおらず、シュードラにはヴァイシャと同じ職業（実業すなわち農業・牧畜・商業）に従事することも認められているのである。

なおシャルマは『実利論』中の奴隸化阻止・奴隸保護規定について、そのほとんどが上位三ヴァルナに関するものであり、シュードラの奴隸はこうした規定から除外されていたと述べている。しかし、同書第三卷一三章の「奴隸・労働者法規」を検討してみると、ここで保護されているのはヴァルナ社会の構成員である四ヴァルナの「自由民」（奴隸に対する自由民）であることがわかる。『実利論』では、無制限な奴隸化によってヴァルナ社会の基礎が崩れることを阻むため、右の規定を必要としたのである。

## 第六章 旧秩序の危機

（前二〇〇年頃―後三〇〇年頃）

本章では、マウリヤ朝の崩壊からグプタ朝成立の直前に至る時代のシュードラについて検討されている。主たる史料は『マヌ法典』であり、仏典や碑文類その他多様な史料でそれ

を補足しつつ叙述が進められる。

この時代のインドは政治的には分裂状態にあり、西北方面からはシュードラとみなされる異民族が相次いで侵入した。一方、経済的には交易が活発に行われ、都市の商工業が繁栄している。こうした時代に編まれた『マヌ法典』は、従来のバラモン教法規（ダルマーストトラ）をほぼ踏襲し、社会生活のあらゆる面でシュードラに差別を加えている。しかし一方では、右のような政治・経済的背景のもとに、シュードラの地位に関する幾つかの変化がみられるようになった。シャルマはそうした変化として、次の点に注目している。

第一は都市の職人の種類と数が増大し彼らの生活条件や地位に改善がみられたこと、第二は法的地位（証人能力や量刑など）の面で一部に差別緩和が認められること、第三は宗教的差別（ヴェーダの宗教からの締め出し）が家庭祭式などで一部で緩められたこと、などである。しかしながら、農村地帯では、ほとんどのシュードラが税を払わね隷属的な農業労働者として個人の土地所有者のもとで働いていた（国営農地の耕作にシュードラを使用するマウリヤ朝時代の経営形態は姿を消した）。またこの時代にシュードラの数が増した。これは、先住部族民や外来民の多くがシュードラとしてヴァルナ社会に編入された結果である。彼らの多くは、かつてのように奴隷や隷属的労働者としてではなく、納税農民としてヴァ

ルナ社会に受け入れられた。すなわち部族民は農業技術を学ぶことによって利益を得、一方バラモンを頂点とする社会は、彼らを新たな生産大衆として編入することができたのである。またこの時代にヴァイシャとシュードラの地位が近づいてきたが、これはヴァイシャのなかにシュードラのランクに落ちた者が多く出たからである。

シャルマは右のように、この時代におけるシュードラの地位の改善の諸面を論じているのであるが、しかし、これまでに述べてきたように、すでに仏教成立時代においてシュードラ・隷属的奉仕階級という等式は必ずしも成立しておらず、マガダなど新開地においては、シュードラとして、農耕社会に編入された部族民も多かったものと推測される。シャルマがこの時代になって顕著化したとする諸現象は過去の時代においても広く見られたのである。

なおシャルマは、古いヴァルナの秩序が崩れたこの時代（とくに二―三世紀）に、ヴァイシャとシュードラは納税や奉仕の義務を拒否するという階級闘争によって上位ヴァルナに反抗し、一方、バラモンとクシャトリヤは強制と妥協の両策を用いて事態に対処したと記している。また下位両ヴァルナのうちでもシュードラによるバラモンへの反抗とくに著しかったであろうことを推論しているが、そうした「反抗」の論拠とされるのは、シュードラに対するバラモンの露骨な

敵意・不信などきわめて曖昧なものである。

## 第七章 農民身分と宗教的権利

（三〇〇年頃―六〇〇年頃）

本章ではヒンドゥー諸法典、宗教文献、文学作品などに拠りつつグプタ期を中心とする時代のシュードラの実態が考察されている。シャルマの主張を簡単に述べるならば、それは、諸法典では依然としてシュードラの無資格性・隷属性が強調されているが、現実にはこの時代に政治・社会・経済・宗教の諸面でシュードラの地位の改善がみられ、シュードラ農民の数が増え、ヴァイシャとシュードラの区別がいよいよ不分明になった、ということになろう。検討されている諸事項は、いずれも次の時代、いわゆるインドの「封建制」「中世」につながる問題であるが、それらの論証過程に幾つかの疑問点が存在する。一例を挙げるならば、シャルマは奴隷のナーヤカ（指導者？）に奴隷間の争議の証人としての資格を与えるという『カーティヤヤナ法典』の記事（4.80）に依拠しつつ、奴隷の間に組織化が広く行われ、それが奴隷制を弱体化させる一因（その他、大戦争のなかったこと、貨幣経済の衰退など）となったことを論じている（p. 55）。しかし、著者自身、後マウリヤ期にすでに奴隷の大量使用はなくなったこと、グプタ期にはさらにその傾向が強まったことを

述べており、グプタ朝の中期以後に編まれた『カーティヤーヤナ法典』の右の記事から自由人に対抗しうる奴隷組織の強化を論ずることはできないのではなからうか。

著者は、本書初版の刊行につづいてインド封建制を論じた研究(*Indian Feudalism, c.300-1200, Calcutta, 1965*)を発表している。本章は両研究書の結合点に置かれた重要な章である。

## 第八章 変化と連続

本書の結論にあたる章であり、古代インドにおけるシュードラの地位の変遷の歴史が概観されている。また論述の過程においてシャルマは、古代インドではシュードラが古典古代の「奴隷」の代役を果たしていたこと、古代インドの生産活動は主としてシュードラと納税耕作者ヴァイシャとの両ヴァルナによって担われていたこと、したがって経済的な面からは古代インドをヴァイシャ・シュードラ社会と呼びうること(宗教的・儀礼的にはバラモン社会と呼びうるという)などの点を指摘している。

## 付章一 『マヌ法典』の年代

### —— 第一〇章を中心として ——

## 付章二 奉仕カースト・農民カーストの増大

以上の各章を総括してみるならば、シャルマはインド古代社会史の展開のなかでシュードラが占めてきた位置をおよそ次のように把えているようである。すなわち、シュードラは、①ヴェーダ時代には部族の旧構成員としての権利の一部を保持していたが、②その権利を後ヴェーダ時代に失って無資格な存在とされ、③マウリヤ朝時代にもその無資格性は引き継がれたが、④後マウリヤ期に地位改善の兆が見られるようになり、⑤グプタ時代になると農民シュードラとして失っていた諸権利を再び獲得した、というのである(シュードラの権利拡大はつづく「中世」においてもいっそう進展する)。こうした大きな流れを念頭に置きつつ著者は、諸時代の文献を渉猟して、その理論を実証しようと努める。評者は、著者のこうした理論には大きな魅力を感じるのであるが、論証の過程でかなり一方的な史料解釈がみられるため、そうした点の幾つかを指摘してきた。ふたたび例を挙げるならば、シャルマは後ヴェーダ期とマウリヤ期をシュードラの地位の最も低下した時代として把えるのであるが、彼がその論証のために使用した伝典や『実利論』の記事からはむしろ逆の結論も引き出せるのである。またグプタ期・後グプタ期におけるシュードラの地位上昇(農耕民化)も、隷属民の自由民化という社会変動の結果というより、むしろシュードラの範疇の拡大(農民をシュードラの範疇で把えることの一一般化)の結果

とみることもできるのではなからうか。こうしたシュードラの範疇の拡大とは逆に、かつてシュードラとみなされていた一部の者たちが不可触民としてシュードラ以下の地位に落とされていったのである。

以上やや批判的にシャルマの著書を紹介してきたが、古代インドのシュードラの歴史を全体的に論じた本書がもつ先駆的な意義は高く評価されるべきであらうし、また冒頭でも記したように、初版以後二〇年以上たった今日においても、すぐれた着想と網羅的な史料蒐集との両面において本書をしのぐ業績は発表されていない。評者自身、これまでシュードラそのものの研究を迂回してきたが、今後、シャルマの提起した多くの重要問題をさらに綿密に検討し、シュードラの実態をできうるかぎり明らかにしていきたいと考えている。

R.S. Sharma, *Sūtras in Ancient India, A Social History of Lower Order down to circa A.D. 600*, 2nd rev. ed., Motilal Banarsidass. Delhi etc., 1980.

G・W・B・ハンティンフォード訳註

## エリュトウラー海案内記

部 勇 造

本書は、ローマ帝政期にエジプト在住のギリシア商人もしくは船乗りにより著わされたと言われる『エリュトウラー海案内記』*Periplus Maris Erythraei* の新しい訳註書である。この書の現存する写本としては、九—一〇世紀のものとされるハイデルベルク大学所蔵本（*Codex Palatinus Graecus*, 398）と一四—一五世紀のものとされる大英博物館所蔵本（*Add. Mss.* 19391）の二種があり、後者は前者もしくは前者と共通の原本からの転写であらうと考えられている。数種の校訂本のうち、フリヌク本（Hj. Frisk, *Le périple de la Mer Erythraée, suivi d'une étude sur la tradition et la langue*, Göteborg, 1927）が写本に最も忠実で、現在一般に使用されている。訳註書も数種あるが、中でも詳細を極めていて今日なお最も広く利用されているのがシヨッフ本（W.H. Schoff, *The Periplus of the Erythraean Sea*, London-New York, 1912）である。但しフリヌク本を利用しなかったシヨッフ氏は主としてシユラー本